

週刊

2011年11月8日 No.9

晩 原発関連情報

インターネットをしらない人のために

編集・発行責任/853-3321 長崎県新上五島町綱ノ浦85-37 歌野 敬
☎0959-42-3427 eメール utano@lime.ocn.ne.jp

とりい よしき のブログから

とりい・よしき: NHK・ETV特集プロデューサー

① 番組はいたって順調だが…10月22日

30日放送のETV特集「果てしなき除染 ～南相馬市からの報告～」の編集が仕上がった。きょう二度目の試写でプロデューサーのOKをもらえたのである。いつもより短い編集期間で、そのうえ途中二泊の南相馬取材を入れながら、なお当初の編集期間を二日残してできあがったのだから上出来だ。

今回は59分番組だが、先日、東北ローカルで放送した「国を待ってはられない」(25分)が原型となっている。ゼロから構築していく必要がないだけ仕事が楽だったのは間違いない。

しかし、いくら番組を作っても、放射能汚染をめぐる矛盾が何ひとつ解決しないのはもちろん、どんどん拡大していく一方なのはいささか気が滅入る。住民が安心して暮らしていくためには、(あるいは避難している住民・特に子供たちが戻ってくるためには)徹底した周辺環境の除染が必要だが、高圧洗浄程度では期待するほどの効果が上がらないことが、だんだん明らかになってきているのである。特に山沿いの地域、屋敷林のある家などでは、洗っても洗っても木々から飛んできた放射性物質で元の木阿弥になる。まるでざるで水を汲むようなことになりかねないのである。

にも拘らず、数兆円規模の資金が投入される「除染」は、ゼネコンなどの企業にとっては新たなビジネスチャンスであり、巨大公共事業として旧来の利権構造に組み込まれかねない側面がある。(ぼくはこれで遠慮して書いているのだが…)何が一番住民にとって利益になるのか充分検証されないまま、本当に効果的かどうか判らない「除染」という既成事実だけがどんどん推し進められていく可能性が出てきているのだ。ダムや、それこそ原発の建設が止まらなかったのと同じ構造である。我がニッポン国はこの期に及んでまだ変わらないのかと、ほとほとうんざりしてしまう。

昨日、「国を待ってはられない」を見てくださった視聴者の方が、「いたずらに恐怖を煽っているの

ではないか」と抗議してこられ、電話で一時間以上議論を戦わせることになった。相手は福島県にお住まいの方で、「自分たちはこれからもここに住まなければならない。それなのになぜ、わざわざ不安をかき立てるような報道をするのか」という趣旨のことをおっしゃる。大変よく勉強されている72歳の男性で、本を読んだり識者の講演会を聞きに行ったりして、「セシウムの健康被害はない」という情報を丹念に集めておられる。その思いをどうやらぼくの番組は逆撫でしてしまったようである。

議論は最後まで平行線だったが、ぼくはこの方の気持がよく解るし、批難する気持ちにはなれない。

「自分たちにはどうしようもないのだから、せめて安心させてほしい」という思いは痛いほど伝わってくる。かといって、現地を知悉しているぼくには“大本営発表”はできない。ことさら恐怖を煽るつもりなどないが、いたたまれない不安のなかで毎日を送っている人達の現実をきちんと伝えなければと思っている。その人たちに対して、「大丈夫、安心だよ」といえる材料をぼくは持っていないのである。

② “果てしなき無責任”10月29日

「果てしなき除染 ～南相馬市からの報告～」が完成した。がつんと手応えのある番組に仕上がったと自負しているし、ぜひ見ていただきたいと思うのだが、作った人間としては複雑な思いがあるのが正直なところだ。

番組では、福島県南相馬市のいまなお高い放射線量が検出されている地域で、不安を抱えながら暮らしている人たちの姿を記録している。取材者として、彼らの置かれた状況に心を痛め、怒りもする。しかし、ぼくはそこに住んでいるわけではない。言わば「逃げ場がある」のだ。そして、取材すれば取材するほど、この問題には「出口がない」ことが見えてくる。明日への展望がないなか不安に囚われる人々を描けば、それは「不安を煽る」ことになるかもしれないと自問する。しかし、やっぱり伝えるべきだと思直す。

最近、放射能がもたらす健康被害よりも、不安な

精神状態が及ぼす被害の方が大きいという話を聞く。たぶん、事実はそうなのだろう、と思う。思いながらも、その不安をもたらしたのは誰だ、と考える。著書「医療崩壊」で知られる小松秀樹先生が、「10ミリシーベルト以下は安全」と発言した福島県立医大の山下俊一氏を擁護した文章を読んだ。山下発言の当否はともかく、(もとよりぼくに疫学的に検討する力はない)小松氏の発言には事実誤認があるように思う。

それは、世を覆う不安感の一因を、南相馬市で活動する坪倉正治医師の言葉を借りながら、「マスコミによる煽り」だとしたことだ。…本当にそうか？原発事故のあとマスコミは大袈裟に不安を煽ったのか？記憶を呼び起こしてほしい、事実はまるで逆だったはずだ。原発事故の後に専ら流布されたのは、「安全だ」「ただちに健康に影響はない」と繰り返す、政府による“大本営発表”ではなかっただろうか。マスコミはその“大本営発表”を垂れ流したのではなかったか。「ETV特集」の尊敬すべき同僚たちが20kmラインに取り残された人たちの現実を伝えるまで、ぼくたちは、現地で本当に何が起こっているかを、ほとんど知らなかったはずである。

あの戦争の時代、楽観的な大本営発表が繰り返されたにも拘らず、少なからぬ日本人が「この戦争は負ける」と気づいていたと聞く。ましてやメディアが多様化の一途をたどっているいま、「原発事故を起きたが、安全だ」などと誰が信じるのか。事実、事態は政府の言明を遥かに超えてエスカレートした。政府が「安全」を連呼すればするほど、“逆・狼少年効果”で誰も信じなくなっただけである。(ぼく自身も二日目には政府発表を一切信じなくなっていた。)そして、その後の政府の対応も不信感を増幅するだけだった。事故後に、「年間1ミリシーベルト以下」だった一般人の被曝許容量を一気に20ミリシーベルトに引き上げたなど、言語道断である。20ミリシーベルトが科学的に妥当かどうかの話ではない。事態を追認して規制値を変えたのでは信頼を失う。一種の後出しジャンケンであり、自分が負けそうになるとルールを変える駄々っ子の所業だ。その政府が、如何に「安全」を強弁したところで、誰も信じるわけがない。つまり、いまや、「政府がいつでも信じてもらえない」のではなく、「政府がいくらこそ信じられない」というのが現実である。国民の不安心理が募るのは当然のことではないか。

山下氏はたぶん誠実な一種の学者バカだろうと推測するが、結果として免罪符の役割を背負わせられているのではないか。小松氏の発言もまた、不安感の所以、つまりはコトの本質を取り違えていると思う。

最大の問題は、原発の推進に当たってきた人たちの無責任である。彼らが終始責任回避しようとした

ことが事故処理を誤らせた。問題を解き明かしていくためには、番組にご出演いただいている児玉龍彦東大教授の次の言葉に立ち戻るべきだと思う。(この言葉は番組の中では使っていないのだが…)「年間線量1ミリシーベルト以上の人は避難する権利がある。国と東電はそれを保証する義務がある」誤解しないでいただきたいのだが、児玉先生は、「1ミリシーベルト以上は危険」だと言っているのではない。危険であるか、ないかは、住民自身の判断に任せるべきだということのである。(当然、判断のためのセカンドオピニオンが求められる。)例え科学的には「安全」である可能性が強いとしても、不安を感じるなら「避難する権利」は認めよう。この考え方は、暗黙のうちに、住民が「原状回復を求める権利」を前提としている。当然のことではないか。責なくして不安のどん底に落とされた人々が、3.11以前に戻すよう求めることに何の無理があろう。

しかし、現実的には原状回復は難しい。少なくともすぐには不可能だ。そういう意味では、取り返しのつかないことが起きてしまったのである。であれば、国と東電は国民に謝罪するしかない。ただ頭を下げればいい、というものではない。「原発は安全だ、重大事故など起こり得ない」と言い募り、原発を推進してきた人たちは責任をとって退場すべきだ。政治家、経産省の幹部、学者、言論人…。事後処理を誤った原子力安全委員会、原子力安全・保安院の幹部は、当然、更迭すべきだろう。そして、東電は、当然ながら破綻させるしかない。

起きてはならないことが起きたのに「責任」を誰も取らないという現状は明らかに異常だ。そして、原子力を推進してきた人たちの責任回避が、放射能の影響はそれほどでもないのに不安を抱く方が悪いと言わんばかりの論調となって、きょうも現地の人たちを苦しめている。ぼくはそこに怒りながら番組を作った。だが、繰り返すが、ぼくには解決の道筋は見えていない。「除染」は、ややもすればざるで水を掬うような話になる。本当にもう一度この土地に住めるのか、問い直さざるを得ないときが案外早くくるのではないか。

放射性セシウム、県北の蓄積に警鐘

小出裕章 毎日新聞 11月1日 群馬地方版

一貫して反原発の立場を取り、東京電力福島第1原発の事故後は事態の深刻さを訴え続ける京都大学原子炉実験所助教、小出裕章さんが、県北部などで測定された放射性セシウムの蓄積量の高さに警鐘を鳴らしている。小出さんは講演に訪れた高崎市内で、医療現場などで管理の徹底が求められる「放射線管理区域」にあたる地域が県内にもあると指摘し、

「放射線への感受性が高い子どもに汚染の低いものを優先して食べさせるべきだ」などと語った。

高崎市総合福祉センターで10月29日夜に開かれた講演会「原発のウソ 汚染の真実-3.11後の社会を生きる」(生活クラブ群馬主催)。小出さんは会場を埋めた300人を前に「どうやってこれから生きていけばいいか、私の考えていることをみなさんにお伝えしたい」と切り出した。

小出さんによると、「1平方メートル当たり4万ベクレルを超えて放射能で汚染されたものは管理区域外に持ち出してはならない」という法律がある。小出さんは研究のため管理区域内に入ることが多いが「この区域内では水を飲むことができず、食べ物を食べてもいけない。寝たり、子どもを連れ込むこともできない。そういう場所が放射線管理区域」という。

小出さんによると、福島県の東半分▽宮城、茨城県のそれぞれ北部と南部▽栃木、群馬県の北部▽新潟、埼玉、千葉県と東京都の一部――に「放射線管理区域」にあたる所があるという。

9月公表の汚染マップでは、みどり、桐生、沼田市や川場村など県東部と北部の山間部を中心に、地表の放射性セシウムの蓄積量が1平方メートル当たり10万ベクレル超～30万ベクレル以下の範囲で検出されており、小出さんの指摘する「1平方メートル当たり4万ベクレル」を大幅に上回っている。

小出さんは「子どもを被ばくから守り、次に第1次産業を守るべきだ」と提言する。子どもは放射線の感受性が高く、0歳児は全年齢平均の4倍に高まり、大人は年を取るごとに感受性が低くなるという。講演では「子どもに汚染の少ない物を与え、残りのものを大人が引き受ける。これしか、やりようがないと思う」と述べた。

また「食べ物について政府は暫定基準値を決め、上をはね、下は大丈夫と言うだけで、汚染の真実を伝えていない。だから、国民はどうしていいかわからない。食べ物の汚染度をきっちり調べて、知らせることが必要。放射性物質を放出した東京電力が責任をもって汚染度調査をすべきだ」と強調した。

女たちの脱原発 座り込み集会ルポ 除染、除染というより、早く子どもの疎開を

毎日新聞11月2日 東京夕刊

10月27日午前、東京都千代田区の経済産業省前に福島県の女性約70人が集まった。原発反対を意味する黄色い服装が目立つ。福島県の女性達が3日間、さらにそれを支援する全国の環境団体などが5日までの7日間、連続10日間の座り込み集会の始まりだ。

「子どもたちを7カ月以上も放射能の海の中に放置したまま。母として女として命を未来につないでいく母性が許さない。私たちはこの思いを3日間に込めて座り込みたいと思います」。企画した福島県の女性有志による「原発いらない福島の女たち」の世話人、佐藤幸子さん(53)があいさつに立った。

佐藤さんは5児の母。福島県川俣町で被災し、すぐに転校できない中高生2人を残して山形県に避難した。農業を営む夫は、安全な農地を求めて岡山県へ。事故で一家離散の憂き目に遭っている。

「福島の女性が主催し、経産省前で直接行動に出るのは初めて。しがらみの残る田舎から出てきて声を上げることが、女性にとってどれだけ大変か。政府は重く受け止めてほしい」と佐藤さん。

この日、参加者らは、原発行政を管轄する経産省の担当者に要請書を手渡した。▽全原発の即時停止と廃炉▽原発を再稼働しないこと▽子どもたちの即時避難・疎開と完全補償▽地元を補助金漬けにして自立を妨げる電源3法の廃止――の4項目。11日までの文書回答を求めた。

だが、担当者は「原発への依存度を、中長期的に可能な限り引き下げていくというのが政府見解。放

射線量の高い場所では除染に努めたい」と繰り返すだけ。福島市の元養護教諭、佐藤早苗さんが「除染している時は周囲の放射線量が高くなるので、先に妊婦や子どもたちを避難させてから作業をしてほしい」と訴えたが、回答はなかった。

国は除染、除染というけれど、懸命に除染しても、大雨で山から土砂が流れ出ると線量が元に戻ってしまう。まずは「子どもたちを疎開させてほしい」というのが参加者の総意だ。交渉の末、翌日、官邸に場所を移し首相補佐官に要請書を手渡した。

座り込み2日目。関西電力が経産省原子力安全・保安院に対して大飯原発3号機(福井県おおい町)の安全評価(ストレステスト)を提出し、全国に先駆けて再稼働に向けた手続きが始まった。フクシマを置き去りにして全国の原発で「安全確認」のシナリオがじわりと進行する。

保安院が入る同省別館前で抗議していた宮城県角田市の農家、杉山仁子さん(51)は「露地ものが健康な野菜だとされていたのに、事故後はハウスものが安全ということになった。自然に近ければ近いほど危ないということに、価値観が180度変わった。生き方まで否定されたような気持ちです」と嘆く。

自然に近い農業を実践してきた。福島第1原発から約60キロ。事故後、屋外で飼っていた鶏の卵から微量の放射線が検出された。屋内飼育に変えて検出されなくなったが、養鶏も、農業自体もやめようかと思いつ悩んでいる。「消費者は、政府に頼らず自ら

安全かどうかを判断する材料を必要としている。食品添加物のように放射線量を表示して売らねばならない時代になってしまった……」

杉山さんら8世帯はカンパを募り放射線測定器を共同購入。今月下旬、一般市民も利用できる低料金の測定室をオープンさせるという。

座り込み最終日。参加者たちは都心の銀座やJR東京駅周辺をデモ行進した。

福島県大熊町から会津若松市に避難している大賀あや子さん(38)は、東電本店前で涙が止まらなくなった。福島第1原発から約8キロの場所に35年ローンで自宅を新築したばかりだった。「新居には地元の材木を使い、屋根にソーラーパネルを乗せ、庭に井戸も掘った。ヤギを飼ってチーズを作るのは私の担当。自然の中で子どもを授かり、育てていきたかった……」「住めない家」のローンが重くのしかかる。「再出発にお金が必要だけど、加害者が勝手に作った賠償案なんて受け入れられない」と憤る。

3日間の座り込みには福島県から延べ200人以上、県外から延べ2000人以上が参加。北海道、大阪、広島、和歌山、富山など国内各地、ニューヨークやロサンゼルスでも福島の女性と連帯する集会が開かれた。

一方、今月23日に発足集会を開く「脱原発をめざす女たちの会」は、評論家の吉武輝子さんや精神科医の香山リカさん、漫画家の倉田真由美さんらが呼びかけ「子どもたちに安全な地球を残すため、エネルギー政策の転換、脱原発の実現」を目指す。賛同人には女優の吉永小百合さん、竹下景子さんらも名を連ねる。呼びかけ人の一人、田中優子・法政大学社会学部教授は「女性、母親が一番心配するのは子どものことでしょう。除染にしても、避難にしても、目の前の問題に対応しなければならぬから、女性の活動は具体的なのです」と解説する。

「私たちの会は個人の活動を通じて知り合った人たちが連絡を取り合ってきたものです。吉永さんもライフワークとして原爆詩の朗読に取り組んでいます。皆、誰かに言われて参加しているわけではありません」吉永さんはドラマ「夢千代日記」で胎内被曝した女性を演じたことから原爆詩を朗読するようになった。7月31日には広島市での日本母親大会で「日本のような地震の多い国では原発はなくなしてほしい」と発言。その姿勢は一貫している。

田中教授は言う。「水俣の公害問題でも被害者が上京して訴えたことで運動が広がった。東北の被災地から出てきて座り込むのは大変なこと。どう息長くサポートしていくか。それが課題でしょう」

福島の女性たちの座り込み集会が終わり、全国の女性に引き継がれた。再会を誓って抱き合い、記念撮影をする参加者たち。

「うさぎ追いし、かのやーまー……」『故郷(ふるさと)』を口ずさむ声がどこからか聞こえてきた。

チェルノブイリ 健康被害、事故の4～5年後

河田昌東 東京新聞 10月31日

チェルノブイ

リ原発事故(一九八六年)から二十五年。周辺の汚染度は今も高く、放射性物質による健康被害も続く。事故現場に近いウクライナ・ジトミール州ナロジチ地区を三十回以上訪れ、支援するNPO法人「チェルノブイリ救援・中部」(名古屋市)の河田昌東(まさはる)理事(71)に、福島第一原発事故との共通点や今後起こり得る事態を聞いた。(脚手美鶴記者)

Q. 現地の状況は?

河田 放射線量は事故直後の三十分の一程度に下がったが、被ばくが原因とみられる病気はいまだ多い。日本では、放射線を浴びると、がんになる確率が高くなるといわれる。現地では、がんよりも、心臓病や脳梗塞、糖尿病、免疫不全になる人が大多数。子どもの糖尿病も目立つ。

Q 福島の事故で、日本でも放射能の影響が懸念されるが。

河田 チェルノブイリで周辺住民に健康被害が出始めたのは事故から四、五年後。福島でも今は目立った影響はみられなくても、結果はほとんど一緒になると危惧する。チェルノブイリの経験を生かし、今から対策をとる必要がある。

Q 健康被害を抑えるためには?

河田 事故後一年目の対応が、後の被害の大きさを左右する。内部被ばくで健康被害を生じた人の半数は、初期に放射性物質を含んだ空気を吸い込んだことが原因。マスクはとてども大事だ。残りは汚染された食べ物を数年間にわたり食べ続けたことによる。結局、汚染された空気や食べ物をいかに体内に取り込まないかに尽きる。

Q 日本で今、必要な政策は?

河田 国は除染作業の具体的な方法や方針を示していない。個人宅の除染に手が回っていないのが現状で、国や自治体がやらない限り、除染は広がらない。

建物の除染は、素材に合わせないと効果がない。たとえばアスファルトは高圧洗浄だけでなく、表面をたわしでこすったり、削りとったりした方がいい。ウクライナでもよくやった。屋根も瓦とトタンではとるべき手法が違う。

森林の除染も非常に重要だ。乾燥した落ち葉は、放射性物質が凝縮され、濃度が高い。街中を除染しても、森から放射性物質を含んだ落ち葉や粉じんが飛んできたなら、除染とのいたちごっこになるだけだ。チェルノブイリでは周辺に森はなかった。森林汚染は福島固有の問題でもある。